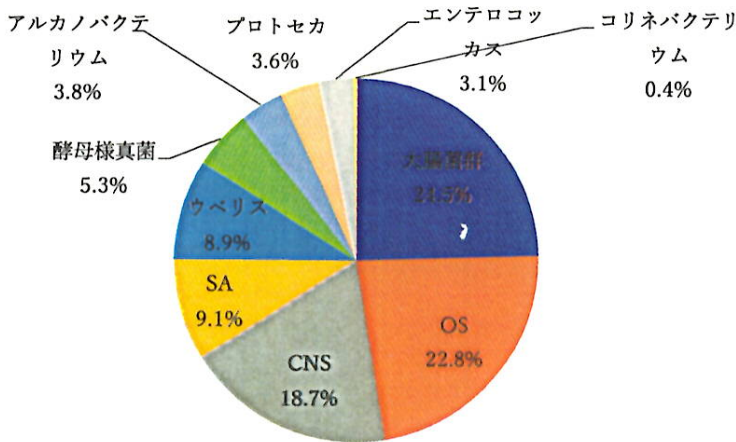


【乳汁検査まとめ】

今回は弊社で行っている乳汁検査について、特に大腸菌群の薬剤感受性についてまとめましたので報告いたします。

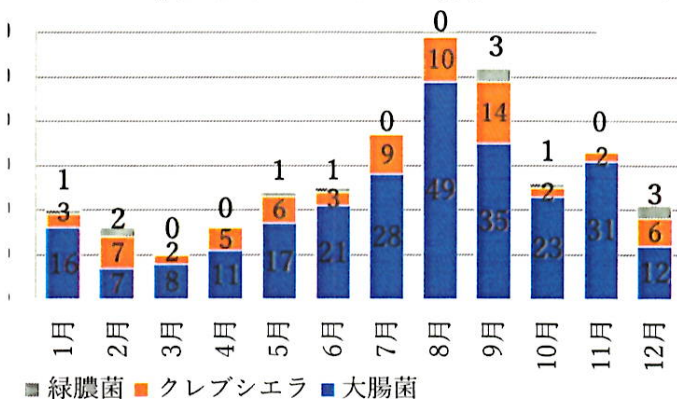
2019年の1年間で実施された乳汁検査では、延べ検査頭数1610頭、延べ検査分房数3266分房(A分房771、B分房850、C分房793、D分房852)でした(重複含む)。この中で菌の生えたものは43.7%、菌の生えなかったものは56.3%でした。スクリーニング検査や乳房炎の治癒判定での検査等含まれるので、菌なしの割合が高いと思われます。

菌の生えたものの内訳は、大腸菌群(大腸菌、クレブシエラ、緑膿菌、その他の大腸菌含む)が最も多く24.5%で、次いでOSが22.8%、CNSが18.7%、SAが9.1%でした。(グラフ1)

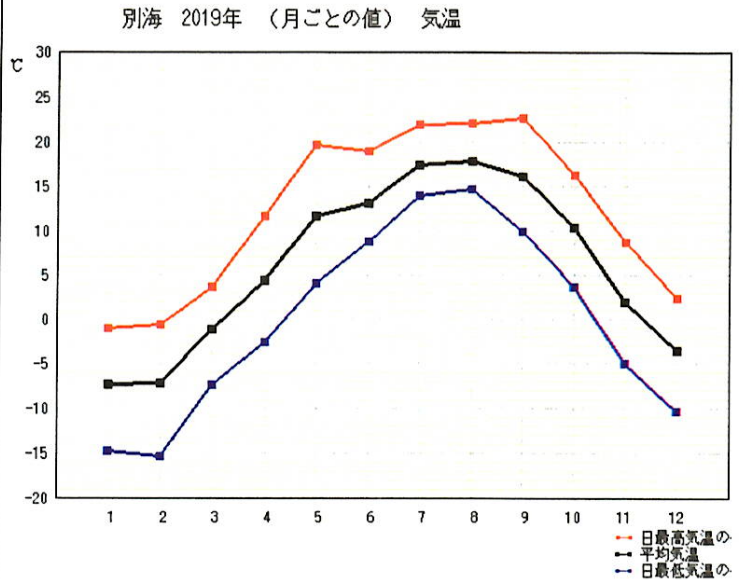


グラフ1 乳房炎原因菌割合

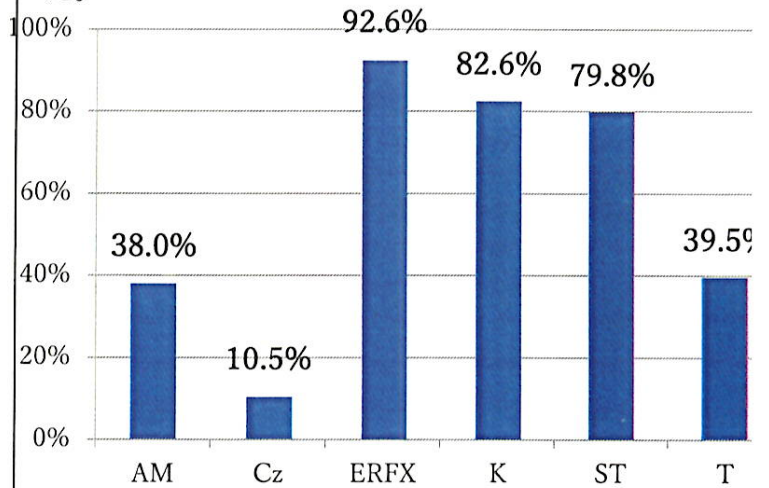
大腸菌群の内訳は大腸菌(その他の大腸菌群含む)が77.2%、クレブシエラが19.2%、緑膿菌が3.6%となり、大腸菌が3/4以上を占める結果となりました。大腸菌群の月別の発生率は7、8、9月が多く、それぞれ37、59、52件発生しています。高温多湿という細菌が増殖しやすい環境に加えて暑熱ストレスによる牛自体の免疫力低下が要因であると考えられます。気象庁のデータ(別海2019年(月ごとの値)気温)とも一致する結果になりました。



グラフ2 月別大腸菌群乳房炎発生数



続いて大腸菌群による乳房炎に対する薬剤感受性についてです。大腸菌性乳房炎に対する感受性薬剤の割合をグラフ3に、クレブシエラ乳房炎に対する感受性薬剤の割合をグラフ4にそれぞれ示しました。

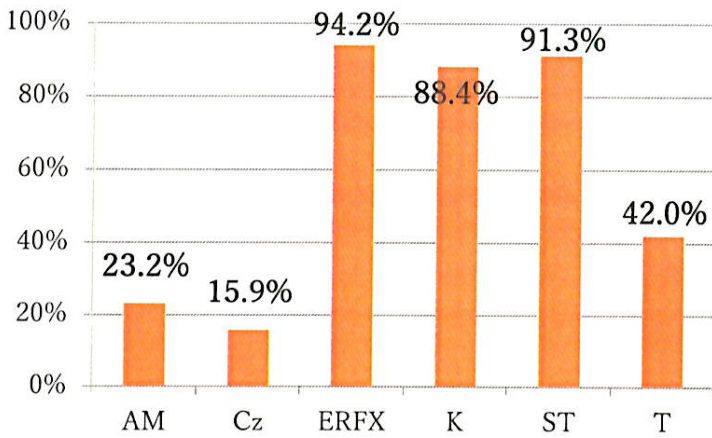


グラフ3 大腸菌性乳房炎に対する感受性薬剤の割合

ERFX、K、STの大腸菌性乳房炎に対する感受性がそれぞれ92.6%、82.6%、79.8%と高い数値を示しました。AM、Cz、Tはそれぞれ38.0%、10.5%、39.5%となり、どれも40%を下回る結果となりました。



Total Herd Management Service



グラフ4 クレブシエラ乳房に対する感受性薬剤の割合

大腸菌性乳房炎と同様に ERFX、ST、K の感受性が高くそれぞれ 94.2%、91.3%、88.4%となりました。AM、Cz、T はそれぞれ 23.2%、15.9%、42.0%となり大腸菌と同様に低い感受性割合となりました。

緑膿菌は発生自体が少なく1年間での発生件数は12件でした。その内、8件では ERFX のみ感受性ありで、残りの4件は感受性薬剤なしという結果になりました。

今回まとめた乳汁検査のデータは牛舎形態、飼養管理、自家治療の有無等様々な農場で発生した乳房炎の乳汁検査の結果です。なので、全ての農場に当てはまるものではありませんので。自家治療する際などは参考程度にお考え下さい。

菌名略称

SA	黄色ブドウ球菌
CNS	環境性ブドウ球菌
OS	環境性レンサ球菌

感受性薬剤略式及び対応薬品

	注射薬	乳房炎軟膏
AM	アンピシリン	—
Cz	セファゾリン	セファメジン・セファゾリン
T	OTC 注	OTC 軟膏
K	カナマイシン	タイニーPK
ERFX	バイトリル	—
ST	トリオプリン	—

富田



Total Herd Management Service